

Research Institute for World History

Newsletter

No. 15 April 2009

C O N T E N T S

1. 寺田光雄
「書評：鳥山孟郎『世界史教育法』青木書店、2008年」
2. 南塚信吾
「紹介：ピッツバーグ大学世界史センター
World History Center at the University of Pittsburgh」
3. Web 世界史
「ヨーロッパ発デジタル情報ポータル『ヨーロッパアーナ』」
4. 世界史研究所からのお知らせ

<http://www.npo-if.jp/riwh/>

発行：NPO-IF 世界史研究所
千葉大学文学部史学科西洋史研究室



npo-if

書評： 鳥山孟郎『世界史教育法』 青木書店、2008年

寺田 光雄



本書は表題をみるかぎり、世界史教育のいわばハウトゥ本であるかの印象を受ける。実際そうした面もあるのだが、評者は本書を一つの思想書として読んだ。ここには著者の長年模索してきた思考が圧縮され折り込まれている。その思考は大まかに言って、①戦後日本で歴史教育が主権者としての民衆側の事柄として追求されてきた流れの中で、今日到達した思考を表現する一具体例として、②歴史教育が今日置かれている国際的な状況を主体的に引き受けようとするさいの思考次元において、読み手の思考を刺激する。歴史教育論の専門家でない者がこのような感想を述べることは不遜かも知れないが、私なりの読み方を書いてみたい。全体を一括して論評したいので、まず目次を示しておきたい。目次は論理に片寄る論評を内容面で補ってくれると思う。

はじめに

第一章“教え方”ではなく“学び方”から考える

- 1 生徒の疑問「何のために歴史を勉強するの？」
- 2 教え込みの授業からの脱出
- 3 具体的な事実についてのイメージを豊かにする
- 4 調べ学習と発表授業の進め方
- 5 聞き取り調査による人との出会い

第二章 歴史的思考法を培うとは

- 1 『全米教育基準』に示された「歴史的思考」
 - 2 因果関係を分析する
 - 3 コロンブスの航海をどのように理解するか
 - 4 人物でたどる八世紀の世界
 - 5 討論学習が思考力をきたえる
- 補論 生徒の心をゆさぶる問題提起

第三章 世界史のなかの日本

- 1 日本史と世界史はどういう関係にあるのか
 - 2 日本・東アジアを軸とする近現代史
 - 3 世界史とは世界とのつきあい方の学問だ
 - 4 中東を知るうえでの教科書記述の問題点
 - 5 現代史の授業内容のつくり方
- 補論 イラク戦争と歴史教育の課題

第四章 国際交流のなかで歴史教育を見直す

- 1 韓国・中国の歴史教育との出会い
- 2 韓国での報告 歴史をどうとらえるか
- 日韓共通歴史副教材づくりのとり組みのなかで
- 3 中国での報告 戦没兵士の死とどう向きあうか
- 歴史認識を深める授業と教師の役割

終章 世界史教育の目的は何か --- 教室からの模索

あとがき

(さらに本文中に25のコラムが参考資料として折り込まれている)

著者は「あとがき」で「ここで述べてきたことがらは私自身が実際におこなってきたことがほとんどですが、それらはさまざまな研究会で多くの熱心な先生方の実践に学び、その刺激を受けながらつくりあげてきたもので

す」と語っている。歴史教師たちのそうした研鑽のなかから結実したものとして、本書は民間教育運動の健在さを示す一例である。

著者は1960年代愛知県の高校での日本史教師を振り出しに、70年に世界史を担当しその後東京都に移り工業高校や普通高校で教えながら、歴史教育の模索をつづけてきた。著者の思考を深めた大きな出会いは75年に東京に移ったときに参加した歴教協の東京世界部会での「世界との出会い」というテーマの研究会であった。そこで感得されたことは、本書に結実した表現でいえば「世界史を学ぶとは、自分の生活を世界の現実（過去の事実も含めて）とのかかわりでとらえる、見直すということ」「万人共通の世界史があるのではなく、人それぞれに知る意味があると感じられたものがその人にとっての世界史だということ」「一人ひとりの教師が教える世界史もまた彼自身が意味があると感じている歴史にすぎない」ということであった。

歴史を学ぶのは自分を知り世界を知るための一つの手段である。制度化された学校の中で何時のまにか授業の受け手よりも学校や教師の都合が優先され手段が目的化されてしまう事態、またそれを強制ないし促す行政や世論。歴史教育もそうした転倒性を内包してきたし今も内包している。「歴史を学ぶのは世界を知るための手段であって目的ではない」という著者の命題は、歴史教師が受け手の立場に立って成心なく世界の認識に向かうときに自ずと思ひ至るはずのこと（と評者は思う）。だが戦後長く、歴史教育が主権者としての民衆側の事柄として追求・模索されながら、その場合でも受け手の自己認識・世界認識の立場に足場を降ろすにはさまざまな難点があった。

戦後の教育論において「教育固有の価値」という見解が教育学者から出されたのは60年代後半であった。それは政府の「人づくり政策」への対抗の論理であったが、民間教育運動に内包された注入型教育指向への批判でもあった。こうした教育学者の一人で後に教科書裁判証人などで活躍する大田堯がその論理を展開する「『問』と『答』との間」や「選りながら発達することの権利について」といった論文を書いたのは60年代後半から70年のことである。歴史家の荒井信一が若い頃「世界史とは世界とのつきあい方の学問だ」と語っていて、著者は80年代半ばにこうした捉え方に出会い感銘を受けたという。評者は荒井の仕事については詳しく知らないが、60年代から歴史研究の分野で<等身大>のところから全体性に向かおうとする研究が一つの流れとして生まれてき

た。マルクス主義や戦後啓蒙がもった俯瞰的で理念主義的な認識枠組みを打破するかたちで。（主権在民理念の現実化に果たしたマルクス主義や戦後啓蒙の役割は、その時代の社会運動とともに正当な評価を与えられねばならないが、今はそこまで論じられない。）

本書の歴史教育についての考え方は、教師も生徒も、世界を知る手掛かりとして歴史に対して<等身大>で向き合うべきものだとする考え方である。歴史研究分野と違って歴史教育において<等身大>の思考が成長し浸透していくにはかなりの時間と努力が必要であったようである。先の歴教協の東京世界部会の吉田悟郎、鈴木亮らの努力はそうしたものであった。著者が彼らと出会い「このような考えに立って授業を組み立てるようになった」のは先にも述べたように80年代半ばであった。評者はこうした事態の到来にはある社会的成熟も必要であったと考える。詳しく立入れないが関連事を一つ挙げると、大田の先のような論理もこの頃社会的にある広がりを受容されるようになる。それには戦後改革とともに高度成長過程や結果がある広がりをもって生みだした個人主義的な自己認識・自己表現活動の展開も背景にあったと考える。

逆に、70、80年代に学級崩壊の現象が現われ始め、また臨教審の唱える「個性尊重」などが教え込み批判へとつながり、それが歴史教育の危機を呼んでいるといった指摘もあるが、社会構造の変化にはそれに見合った論理の成熟と対応が必要である。

先のような人間形成観をもつ本書の中身は、どうすれば受け手の立場に立つ教授法となりうるのかという模索によって構成されている。もちろん、教師も生徒も世界に対して共に<等身大>のところに立つといっても、制度化された学校教育内部のことで、その制度内でどれだけ人間的なつきあい方が相互にできるかという模索である。

著者は、生徒の主体性尊重のための様々な模索をしている。授業を周到に準備しつつ、「生徒が最もやる気を出すのは、教師が設定した課題や目標を一律に押しつけられるときでなく、自身の選択によって自分で目標を設定できる場合である」といった思いで様々な工夫をしていく。その準備の木目細かさはベテランならでのものという印象を受ける。おそらく若い教師はそれを参考に自分なりの授業を組み立てる刺激を与えられるであろう。

評者の思いでは、著者のそうした準備や工夫を支えるものに二つの支柱があって、それが本書をハウトゥ本に

終わらせない思想書と感じさせる要因となっている。その一つは、思考力をどうつければいいのかという基底のところ「考えるとは言葉を使って考えること」であるという認識のあることである。「社会科としての歴史教育において、わかる、理解するとは、いいかえれば『言葉で説明できること』を意味する。」本書では社会科や歴史教育だけが話題になっているが、「考えるとは言葉を使って考えること」という認識やその深い理解は、社会の様々な場面で人の豊かな交流のために必要な要件である。

戦後改革とともに高度成長過程や結果がある広がりをもって生み出した個人主義的な自己認識・自己表現活動の展開は、社会構造の変容とも相俟って個々の自己認識・世界認識形成のあり方を多型多様に分化した。思考と言葉への理解は、この分化に対応する重要な手掛かりになる。70年代に、人と知性の成長のあり方を在野で模索し始めた哲学者の長谷川宏は、手掛かりとして言語問題を重視し、言語について「単一の記号が単一の指示作用をよびおこし、単一の指示物へとつらなるという過程は言語世界にとってはきわめて特殊な事例」にすぎない、「意味のふくみのうちには、個々の具体的状況が具体的なままにふくみこまれている」のだから「意味のふくみ」は一義的でない解釈可能性を伴うと指摘している（『ことばの探索』『ことばへの道』）。著者の言語についての記述はよく展開されたものではないが、同種の自覚をもっている。「生徒は教師が教えたとおりに理解するのではなく、生徒自身の姿勢と考え方によってそれぞれ異なる受けとめ方をしている」と語る。そうした認識が著者を注入型教育から遠ざけ受け手の思索を尊重する工夫へと導いている。生徒たちとの対話の深度も深いはず。

もう一つの支柱は「日常の生活感覚」の重視である。著者は調べ学習に授業時間の約三分の一を当ててきたそうだが、自分と世界との関係を「日常の生活感覚」に繋げて「想像を広げて」捉えていけるよう工夫する。「モノ」についての学習では世界史につながる種々の「モノ」が素材になる。10の地域に分けた「地域研究」では各グループが一地域を調べるが「人々の生活や文化」から歴史や社会へと進んでいく。

人は、社会のしくみや歴史の変化を認知する場合、通常それが生活意識と繋がるものであるときに当事者性をもつ。「過去の日本によるアジア諸国に対する侵略、植民地支配、加害の問題を学習するとき」にも、この線上で考え「日本の平和と安定のためにはアジア諸国との友好、協力関係を深めていくことが必要だ」という視点が不

可欠だと、私は考えている」とする。そしてそうした生活意識の存在を、国境を越えた人々の生活についても想像を広げて捉えていくことが、著者のねらいである。

紙幅の関係でここで打ち切るが、著者のこうした歴史教育論は歴史研究に対し、多型多様に分化した自己認識・世界認識形成のあり方に対応できる、また国境を越えた人々の生活意識と交感可能な私たちの生活意識形態について、研究と叙述がどのような形で生みだされえているのかと問いかけているように思う。

紹介：ピッツバーグ大学世界史センター World History Center at the University of Pittsburgh

南塚 信吾

2008年10月、アメリカのピッツバーグ大学において世界史センターが発足した。10月16日にその開所式が行われ、所長パトリック・マニング Patrick Manning 教授のもとで正式に活動を開始した。同センターは、ピッツバーグ大学の史学科に置かれ、同大学の国際研究センターのグローバル・スタディ・プログラムと密接な連携関係にある。史学科の一部に独自の部屋を確保し、常駐のスタッフ1名と、非常勤の技術員1名を擁して運営されている。

同センターの目的は、

規模の大きな分析を含めて、歴史研究の地平を拡大すること。

人間の過去を探求することによって、研究者のグローバルなコミュニティを作る必要性を呼びかけること。

過去に対するトランス・リージョナルで、学際的で、相互作用的な見方を促進すること。

である。

具体的な活動としては、世界史のデータバンクの創設、年に一回の研究大会の開催、各種セミナーの開催、学部・大学院での世界史教育の促進、ポストドクに対するフェローシップ（2年間）、客員研究員の招聘などである。2008年9月からピッツバーグ大学に客員研究員として滞在していた南塚は、10月から同センターの第一回目の客員研究員という位置づけが正式に与えられた。

同センターは、アメリカの World History Association (WHA) はもちろん、アジア世界史学会 Asian Association of World Historians (AAWH)、Network of Global and World History Organizations (NOGWHISTO) とともに密接に関連しながら活動することになっている。また、われわれの世界史研究所とも強い連携を維持することを期待している。

同センターでの世界史研究の特徴として目立つのは、学際性の強調である。開所式でのマニング教授の講演でも出ていたが、たとえば、アフリカの人口や移民の歴史を考えるときに、自然的要素を加味して考えざるをえないという指摘や、人口の歴史を考える際に、文字史料だけではなく、絵画のような芸術的史料をも利用せざるを得ないのだという指摘が、注目される。こういう点から同教授は、そもそも世界の学問における分節性を問題にして、歴史学内部の細分はもちろん、歴史学と人類学や社会学などとの分化、また、人文科学と社会科学への分化、そして人文・社会・自然への学問の区分などが、世界史という視点から見ると、異常な事態なのであると強調するのである。こういう学際性が同センターにおいて、どのように展開されていくのかを注目したい。

同センターの活動の点で注目したいのは、高等学校などでの世界史の教育者 teachers との連携である。この間、わたしが話題提供者となって、日清・日露戦争期の国際関係史と最近の日本における教科書問題をテーマにして、二度にわたって世界史セミナーが開かれたが、いずれも熱心な高校の先生が20人ほど参加して、熱のこもった討論が行われた。討論を聞いていると、日本における「世界史」教育の問題と類似の問題に、先生方が直面していることが伺えた。たとえば、世界史というやや抽象的な教材にいかに関心の向けさせるか、身近な材料からいかに世界史を連想させるか、国民史をいかに「越境」していくかなど、多数の問題について種々の経験が披露され、議論された。

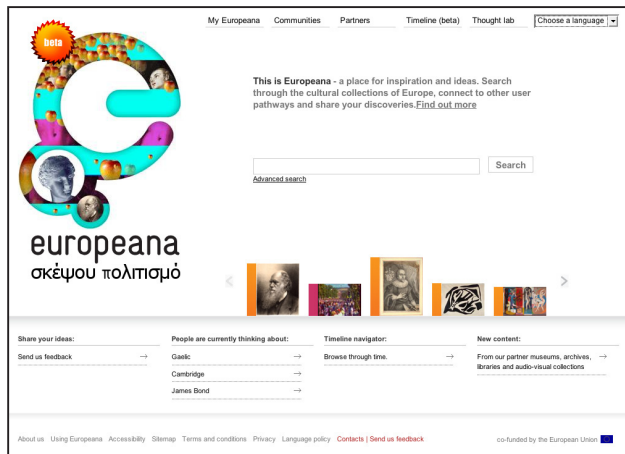
センターがこうした運動の核になっていることは、重要なことであるとの認識を深めたしだいである。(2009年1月10日記)

Web 世界史

毎回 Web や CD-ROM など電子化された世界史研究情報を紹介していきます。
世界史研究所のウェブサイトにもここで紹介したものを掲載しています。

ヨーロッパ発デジタル情報ポータル「ヨーロピアーナ」

<http://www.europeana.eu/portal/index.html>



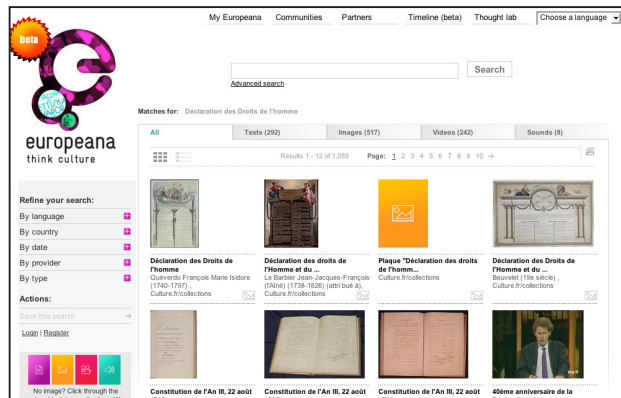
▲ Europeana

<http://www.europeana.eu/portal/index.html>

今回はヨーロッパで試みられている巨大情報ポータルサイト「ヨーロピアーナ (Europeana)」を紹介します。

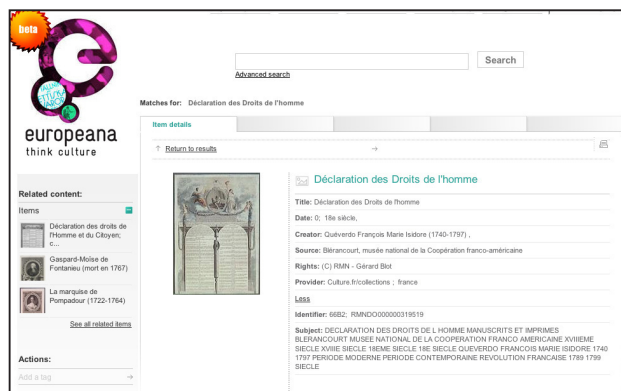
このポータルサイトは EU の援助を受け製作され、ヨーロッパ各国の図書館、博物館、文書館の協力の下、現時点で約 200 万点という膨大な量の書籍、音声、映像、動画、絵画、手稿史料などのデジタル・データを公開しています。公開資料の数は今後も随時増加され、2010 年には 600 万点の公開を予定しています。

「ヨーロピアーナ」は当初 2008 年 11 月から一般公開を予定していました。しかしサービスが開始されるやいなや、予想以上のアクセスが集中し、サービスが中断することになりました。2009 年 4 月時点では、β版として、機能を限定しつつも試験運用されています。



▲ Europeana のサイトで「フランス人権宣言」を検索した様子

例えば上の画像は「ヨーロピアーナ」のサイトで「フランス人権宣言」を検索した様子です。「フランス人権宣言」に関連する画像、文字、映像、音声といったさまざまな史資料が一覧として表示されます。



▲ 史資料の一つを選択した様子

ためにしに史資料の一つを選択してみます。するとこの史資料の「タイトル」、「制作年」、「制作者」、「典拠」、「著作権情報」、「所属機関」および「概要」が表示されます。ただし史資料の保存フォーマットは史資料の「所蔵機関」によって異なっているようです。例えば文字資料の場合、text, html, pdf, tiff などといった様々な保存形式が併存しています。多くの史資料は「ヨーロピアーナ」を経由してダウンロードすることが可能ですが、同じ種類の史資

料であっても所蔵機関によって配布形態や表示形態が異なっています。

特に文字資料に関しては、同様のサービスを提供しているグーグルの「ブック検索」(<http://www.books.google.com/>) の場合、所蔵機関が異なってもほぼ同じ形式でダウンロードできます。「ヨーロッパナ」が現時点で「β版」であることを考慮しても、まだまだ改良の余地がありそうです。



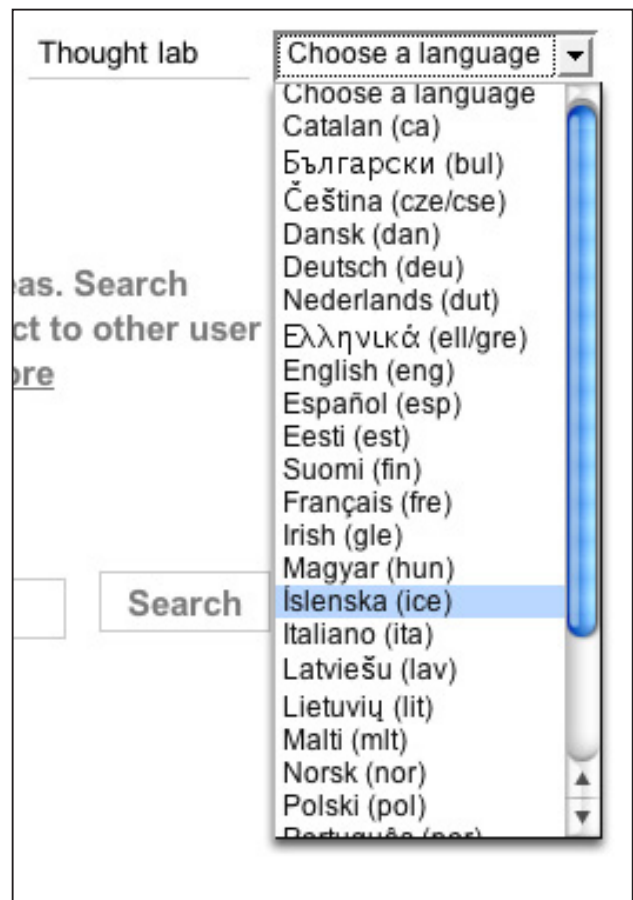
▲映像資料の再生

映像・音声資料の場合、検索した単語に関連するニュースやドキュメンタリー作品などが表示されます。これらはブラウザソフト上で再生することが可能です。ちなみにこれらデータの検索、閲覧、ダウンロードに関して課金はなく、自由に利用することができます。

このように「ヨーロッパナ」は、文字、映像、音声といったさまざまな形式で保存されている史料を横断的に検索することができます。またこれまで国、地域によって囲い込まれていた史資料を、国民国家の枠組みを越えてEU各国で共有しようとする試みであります。さらにインターネットの特質上、EU域外に暮らす人々にもその門戸は開かれています。これは単一のヨーロッパを目指すEUの文化戦略の一貫ともいえるでしょう。このような史資料の共有によって、各地域の歴史認識がどのように変化していくのかは、歴史家のみならず興味深い点であります。

EU域内での「国民の歴史」を相対化しようとする試みは、使用言語という点でも非常に興味深い形で表れています。このような資料を集積するポータル・サイトの多くは、使用言語として英語のみか、あるいは現地語を

加える形で運営されていることが多いように思われます。しかしこの「ヨーロッパナ」の場合、英語、フランス語、ドイツ語といったヨーロッパの主要言語のみならず、23のEU公用語、さらにはカタルーニャ語などを含む総計25の言語でホームページを表示し、検索をかけることができます。このような徹底した多言語仕様は、知識を獲得する上での言語の障壁を、劇的に低減させることでしょう。しかしその反面、すべての言語への翻訳作業には膨大な時間と労力が割かれていることが想像されます。



▲言語の選択画面

アクセスの集中によるサーバー管理の脆弱性、コンテンツ収集の進捗具合、表記、説明の多言語間でのすり合わせ、なにより巨大すぎるプロジェクトに対する資金提供がこの世界的な不況下でどこまで継続できるのかわるか、楽観視することはできません。しかしながらこのプロジェクトが目指す所や提供される史資料の質は、非常に魅力的であり、今後もその発展を期待したいと思います。

世界史研究所からのお知らせ

学会・シンポジウム情報

.....

春の学会シーズンを迎え、いくつかの学会で世界史をテーマにした講演会や討論会が開催される予定です。夏には北海道でも世界史教育に関するシンポジウムが開催されます。教育・研究の両面で世界史に対する注目が高まっていることがうかがえます。以下にその一部の情報をまとめました。当研究所が関わっている企画もありますので、皆様方のご参加をお待ちしております。

■ 2009 年度歴史学研究会大会

会場：中央大学多摩キャンパス（東京都八王子市東中野 742-1）

日時：5月23日（土）、5月24日（日）

大会プログラム URL：http://wwwsoc.nii.ac.jp/rekiken/annual_meetings/index.html

第2日目 5月24日（日） 13：00～17：30

特設部会 社会科世界史60年

茨木智志 「『社会科世界史』はどのようにして始まったか」

小川幸司 「苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている」

南塚信吾 「大学における世界史教育は可能か」

趣旨説明文 URL：http://wwwsoc.nii.ac.jp/rekiken/annual_meetings/index.html#tokusetu

※大会参加方法や会場へのアクセスについては上記アドレスをご覧ください。

■ 日本西洋史学会第59回大会

会場：専修大学生田校舎9号館・10号館

日時：6月13日（土）、6月14日（日）

大会プログラム URL：<http://www.soc.nii.ac.jp/jswh/2009//program.html>

第2日目 6月14日（日） 14：00～17：00

小シンポジウムⅣ（10号館2階10202教室）

記憶としての戦争—その形成や教科書叙述をめぐって—

司会：日暮美奈子（専修大学）

報告：竹本真希子（広島市立大学広島平和研究所）「第一次世界大戦とドイツの平和主義者」

永原陽子（東京外国語大学）「植民地戦争の記憶とヨーロッパにおける歴史認識」

近藤孝弘（名古屋大学）「ドイツにおける第二次世界大戦をマンガで教える試み

—グラフィック・ノベル Die Entdeckung と Die Suche が示す歴史教育の展開—

鳥越泰彦（麻布高等学校）「歴史教科書の中の第二次世界大戦」

※大会参加方法や会場へのアクセスについては上記アドレスをご覧ください。

■北海道高等学校 世界史研究会 40 周年大会シンポジウム

主催 北海道高等学校世界史研究会 共催 大阪大学歴史教育研究会・世界史研究所

テーマ 「高校生に教える『20 世紀』とは？」

2009 年 8 月 7 日 (金) 講演・パネルディスカッションなど

会場：北大共通講義棟 W-103 or 203 (当日共通講義棟入り口へ掲示します)

8:00 受付開始 (8:30～9:00 研究会総会)

9:00～ 会長挨拶

共催者代表挨拶 (大阪大学教授 森安孝夫)

— 大阪大学はどうして「全国高等学校 歴史教育研究会」を組織したか?—

9:30～11:00 基調講演

南塚信吾 (法政大学教授・千葉大学名誉教授)

「89 年革命とは何だったのか?—ハンガリーの経験から」(仮題)

11:00～12:15 講演

桃木至朗 (大阪大学教授)

「東南アジア現代史をどう考え、どう教えるか—いくつかの誤解と偏見」(仮題)

昼食

13:30～14:30 講演

古矢旬 (東京大学教授・総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター長)

「アメリカ現代史から 20 世紀を考える」(仮題)

14:30～14:50 講演 (Web 上より講演予定)

秋田茂 (大阪大学教授)

「グローバルヒストリーと高校世界史の 20 世紀」(仮題)

休憩

15:10～ 北海道の高校側より報告

15:30～ パネルディスカッション 鳥越泰彦 (麻布高等学校) 三木健司 (拓殖大学)

講演者 3 名 (司会進行 吉嶺茂樹 (札幌北高校) 榊原康文 (札幌星園高校))

18:00～ 懇親会 会場未定 (近くのホテルにて)・参加費 (4000 円程度)

8 月 8 日 (土) 巡検<概略予定> 参加費: 3000 円程度 (交通費・観光船経費他)

8 時 30 分 北海道庁赤れんが前集合→館内→石狩街道を通り石狩市本町地区へ (博物館見学その他) →銭函 (ぜにはばこ)・張碓 (はりうす) の旧市街の旧市街→小樽へ (観光船で海から小樽を見学) →祝津・小樽市博物館・別館・“北のウォール街” 見学 (旧日銀小樽支店他) →昼食→小樽商科大学 (図書館貴重図書見学) → (藻岩山より札幌市内遠望) →札幌駅解散予定 (17 時頃)

シンポジウム参加費 2000 円 (懇親会費・巡検費・昼食代等は別です。)

【お問い合わせ】北海道札幌北高等学校 吉嶺茂樹

E-MAIL yosimine-shigeki@hokkaido-c.ed.jp Fax 011-736-3193

詳しい申し込み方法・申し込み用紙等は e-mail にて上記までお問い合わせ下さい。

NPO-IF 世界史研究所

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-17-3 渋谷アイビズビル 10F TEL: 03-3400-1216 FAX: 03-3400-1217

E-mail: world_history@npo-if.jp URL: <http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/>